

目次

はじめに	3
前書	5
. 基本的文書(Foundational Document)	9
. プレゼンテーション	15
1 .養成と学問との関連における J P I C - 疎外された人々の視点からの考察 -	15
2 . 疎外された人々の視点から見た福音宣教と J P I C ..	26
3 . 総長のプレゼンテーション	39
. 総括文書	65
1 . 大会の最終メッセージ	65
2 . 提案	68

日本語版は原本の 、 、 を翻訳したものです】

はじめに

このたび、2006年1月30日から2月8日まで、ブラジルのウベルランディアで開かれた第二回正義と平和・エコロジー（JPIC）国際大会の議事録を会のすべての兄弟たちにお送りすることができて大変嬉しく思います。

この議事録は、ローマ総本部のJPIC担当室にて入念に作成されたもので、大会での出来事をまとめたものです。テーマは、「現代の疎外された人々を抱きしめて」となっております。

この大会は、出席されたJPICの推進者（アニメーター）にとっては恵みの時でしたし、すべての参加者にとっては兄弟の交わりの体験の場でした。この大会は、真剣に考える場と、世界各地から集まった兄弟たちが現代の疎外された人々のために行っている活動について互いに分かち合うチャンスを与えてくれました。このようにして私たちは、1206年にハンセン病者に対して示した聖フランシスコの憐みの行為が、現代の多くの兄弟たちの日常生活に反映されていることを確認することができました。

この大会の成果が、会のすべての管区・分管区で引き継がれること、そして、私たちすべての兄弟が、宗教的、民族的、社会的、政治的な理由で疎外されている人々により近くなることが私の心からの願いです。この差し迫った願いは、私たちが小

さき者であること、そしてそれゆえに、貧しく十字架につけられたイエス・キリストに従っているという事実から生まれています。

第二回 JPIC 国際大会にご出席くださったすべての兄弟と、大会の準備と開催のためにご尽力くださったすべての兄弟、特に、ローマ総本部の JPIC 担当室の兄弟たちに感謝いたします。

主が、豊かな平和とまったき善をお与えくださいますように。

2006 年 5 月 8 日、恵みの仲介者である聖母の祝日に、

総長

兄弟ホセ・ロドリゲス・カルバッリヨ ofm

前書

第二回 JPIC 国際大会は、会の創立 800 年祭のために本部執行部が提案した計画の一環として、私たちだれにとっても非常に重要なものです。なぜ重要かと言いますと、大会のために選ばれたテーマ「現代の疎外された人々を抱きしめて」が、アシジのフランシスコの回心のプロセスにおける貴重な瞬間に私たちを結びつけ、さらに、私たちに徹底した「生活様式」(*forma vitae*) を選び取るように導いてくれるからです。

周知のことですが、ハンセン病者は、社会的にも、文化的にも、政治的にも、そして宗教においてすら、その最も基本的な権利から「締め出されて」いました。フランシスコは、その「遺言」の中で、主がどのように彼をハンセン病者の中に導き入れ、彼がハンセン病者たちをどのように慈しみをこめて遇したかを語っています。私たちの 800 年の歴史の中で、小さき兄弟たちは、それぞれの時代の、またそれぞれの地域の「ハンセン病者」と、その捉えかたや関わり方は違っていても、つながって生きて来ました。私たちは彼らと生活を共にし、彼らが神の子としての尊厳を回復するのを助けて来たのです。

会の最近の総集会や総評議会は、この 800 年の伝統を踏まえ、私たちに疎外された人々のそばにいるようにと再び呼びかけています。そして、彼らが尊厳をもって生きる権利、すなわち、政治や経済、文化、技術などがグローバル化する中で次第

に失われてきた権利を、取り戻すことができるよう、彼らのために働くようにと私たちに呼びかけているのです。この点を踏まえ、第二回 JPIC 国際大会は、以下の目標を提案いたします：

小さき兄弟たちの多くの体験を世界中の疎外された人々と分かち合うこと。

疎外を生み出す原因、疎外を可能にするプロセス、そして、疎外が個人や民族、環境に与える非人間的な影響について、神のみ言葉とフランスカン霊性と社会学とを根本に据えながら、考察すること。

現代の疎外された人々がその基本的人権を回復しようと努める過程において彼らに同伴するためのいくつかのガイドラインを JPIC 推進者に提供すること。そのために、会やフランスカン家族、教会、社会などと積極的に協力する。

これらの目標を達成するために、本大会は、見て、判断して、行動するという方法に着眼しました。したがって、疎外された人々と共にある兄弟たちの「体験」(experience)は、本大会の出発点でした。そして本大会に同伴したのは、専門家や会の総本部事務局とグループ別作業部会が提供した聖書とフランスカニズム、および社会学に関する「考察」(reflection)でした。そして、これらのすべてが「決議」(commitment)として最終提案にまとめられました。

もっと詳しく述べますと、本大会は、以下のような方法で進められました：

1. 体験(見ること)。本大会の前に、参加者に次の質問に答え

ていただきました：あなたの地域では、疎外のプロセスはどのような形で現れますか？疎外されているのはどのような人たちですか？疎外されている人たちはその状況に対してどのような反応を示していますか？彼らはどのように団結していますか？彼らが団結するプロセスに私たち兄弟はどのように関わっていますか？関わっていないとしたら、それはなぜですか？本大会期間中、参加者はこれらの質問に対する答えを分かち合いました。この他、4名の参加者に JPIC 推進のための重要な体験談について話していただきました。体験談のテーマはそれぞれ、内面的な JPIC の推進；戦争状態における活動；民族間の和解のための活動；津波の犠牲者のための活動、でした。最後に、6つのワークショップを大会参加者のために設けました。テーマはそれぞれ、如何にして JPIC を推進するか；HIV/AIDS の問題；環境正義；倫理的投資；難民；積極的な非暴力、でした。これらの最後はすべて土地を持たない人々と共に過ごした体験で締めくくられました。

- 2 . 考察（判断すること）。分かち合った体験に基づいて、聖書の専門家、フランスカン靈性の専門家、社会学の専門家、養成・学問事務局長、福音宣教事務局長、および総長が、参加者に同伴して、質問や、助言や、挑戦や、意見交換などを行いながら、共に考察しました。
- 3 . 決議（行動すること）。参加者は、自分の体験を分かち合い、さまざまなプレゼンテーションを聴いて、少人数グループで分かち合いをした後で、最終的なメッセージや提案事項を作成しました。

今回は、本大会の主要な提案についての考察を促すために、また、それらを実行に移すのを助けるために、本大会の前と会期中にいくつかの文書を準備いたしました。それらは次のようなものです：会の最近の文書から取った、より重要な行動のガイドラインを含む基本的な文書（foundational document）；ローマ JPIC 担当室より参加者に送られたアンケートの回答のまとめ；大会のより重要な出来事を綴った記録；疎外された人々について事務局長たち（General Secretaries）が準備したプレゼンテーション；現代の疎外された人々の中であって預言者となるようにとの総長のメッセージ；参加者からのメッセージとすべての兄弟への提案事項を含めた総括文書。

この資料集が、より人間的な生活を自らの手でつくろうとしている現代の疎外された人々に、アシジのフランシスコとクララの精神で同伴する私たちの助けとなることを、願っております。

ローマ、JPIC 担当室

． 基本的文書(Foundational Document)

2009 年は小さき兄弟会の創立 800 年を記念する年です。小さき兄弟会の本部執行部は、記念祭までの 3 年間を、私たちのカリスマと、21 世紀に生きる小さき兄弟とは何者かについて深く考える時期と決めました。

会は、2006 年 9 月に臨時総集会を開きます。しかし、その総集会に先立つ 2006 年初めに、ブラジルで正義と平和・エコロジーの第二回国際大会が開かれることになっており、そこで、これらの問題について考える場が与えられます。総長ホセ・ロドリゲス・カルバッリョ兄弟は、この大会を招集する書簡の中で、800 年祭をカイロスとして、すなわち、「さまざまな文化的状況下で生きてきた私たちの歴史を思い出すだけでなく、特に、私たちの預言者としての召命に基づき、教会と現代社会から突きつけられる現実問題に応えるための」チャンスとして捉えています。

したがって、JPIC の推進者である私たちは、まず、JPIC のプロジェクトに取り組むに当たっての、フランシスカンの立場、教会の立場、そして社会の状況を理解しなくてはなりません。臨時総集会を準備するために選ばれた委員会は、すべての兄弟がマドリッド総集会の宣言「現代のフランシスコ会の使命」を読み、研究するようにと提案しました。この文書は、現代社会の真ただ中におけるフランシスカンのアイデンティティーの

理想とは何かを示すことを主眼としており、私たち一人一人に真剣に良心の糾明を行うようにと促しています。フランシスカン生活の中心には、神への信仰体験と、イエス・キリストとの個人的な出会いがある、とこの文書は先ず指摘しています。私たちの福音的な信仰生活は、教会との交わりのうちに、派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟たち（brothers-in-mission）として生き抜くことです。フランシスコのような、交わりのうちに生きる深い信仰は、私たちの目を現代世界に向けさせ、現代の風潮が私たちに突き付ける挑戦に耳を傾けるように私たちを導いてくれます。この文書は、人々の間に兄弟的な共同体を築くことが私たちの願いであると言っています。つまり、仕える者となるために権力を拒否し、貧しい人々と親しく接して、抑圧されたすべての人々の運命に共感できるような生活様式を選び取る共同体のことです（マドリッド宣言 33）。マドリッドの宣言は、私たちのアイデンティティーについて、および私たちの置かれた状況について考える良い出発点となっています。

1983年にバヒアで開かれた総評議会は、マドリッドの志を受け継いでいます。ブラジルに集まった兄弟たちは、次のように述べています：「希望と願望に満ちたこの世界には、人間の基本的な必要を満たしたいとの願いと共に、共同体と平和と正義と人間の尊厳の育成を願う気持ちがあることを私たちは知っています。それと同時に、社会は、無神論と宗教的無関心、イデオロギーの対立、戦争、人種差別、抑圧、広がる貧富の格差に悩まされています」（バヒア 13）。これに対し、兄弟たちは、私たちが福音を宣べ伝える先駆者となるように、また、すべての人々

の間に神の家族を築くために努力するように、そして、共同体を心から求め、新しい、より人間的な社会に飢え渴く人々に模範を示すように招かれていると応えました(20、23)。バヒア総評議会は兄弟たちに対して、貧しい人々と共に暮らして、彼らの目線で歴史と現実を見るように(31)、そして、私たちの福音化が貧しい人々からもたらされ、貧しい人々と共に完成するために、貧しい人々を優先するようにと要請しました(39)。

2003年の総集會も再び同じテーマを取り上げました。総集會に出席した代表者たちは、「心地よい生活スタイルに適應させようとして、福音の預言的価値を薄めて解釈することのないようにしなければならない」と私たちを戒め、「平和への道である正義と愛に基づく生き方と関わり方への新しい展望を呼び起こすように」と勧めています(総括文書2)。時のしるしを福音に照らして読み、解釈するということが、福音宣教には絶対に必要であり、時のしるしを読み取らないならば、この世界における私たちの働きは無駄になる危険があることを忘れてはなりません(6)。私たちは連帯の經濟を築くように、そして、最低限の正義をすべての人に保証できるような、人間の侵すべからざる尊嚴を尊重する倫理觀を打ち立てるように求められています(10、11)。私たちは、分裂と争いに満ちたこの世界に対話を広め(15)、あまりにも多くの兄弟姉妹たちが閉じ込められたと感じている社会の割れ目に身を置くように招かれているのです。JPICの大会に出席した兄弟たちは、総集會で承認され、会のそれぞれのレベルで現在実行されているJPICの提案事項に特別な注意を払わなければなりません。

私たちがそれぞれの任務を果たすための環境を定めたこれらの文書に基づき、私たちは JPIC の活動を世界中に推進する任務を負った兄弟として、ブラジルに招かれました。この大会のために選ばれたテーマ「ハンセン病者を抱きしめるフランシスコ：現代の疎外された人々を抱きしめて」は、会が過去 40 年間に行ってきた考察の当然の帰結なのです。この大会を招集する書簡の中で、総長は、私たちの当面の課題について明確に次のように述べています：「第二回国際大会は、疎外のプロセスをじっくり研究し、さまざまな社会環境の中で疎外された人々が誰なのかをはっきりさせ、しかる後に、本会の優先課題と各管区の体験とに照らして、とるべき行動の指針を示すように提案します。それは、私たちが小さき兄弟としての私たちの生活様式に基づいて、フランシスカン家族や地域の教会や民間の組織と協力して、疎外された人々がその基本的人権を取り戻す道を歩むに際して彼らに同伴するためです。」また、世界各地から寄せられる情報を分析し、会全体における JPIC の立場を明らかにし、直面するグローバルな問題に対処する具体的な行動を提案することも必要です。

本大会での作業を円滑に進めるために、すべての推進者（アニメーター）はマドリッド文書とパヒア文書、及び 2003 年の総集会で出された JPIC の提案事項を研究してください。これらの文書の研究はできる限りグループで行うようにしてください。各推進者は、自分のいるそれぞれの地域で「時のしるしを読む」必要があります。そして、その地域で「疎外された」人々

とは誰なのかを知り、現在進行中の疎外のプロセスを突き止め、JPIC と社会運動、特にその地域で疎外された人々を代表する運動との間にある協力のレベルについて話し合う心構えがなくてはなりません。推進者たちはこうした情報を大会で互いに分かち合いますが、そうすることによって、今後の活動提案を練り上げる基盤ができると思います。

本大会でもうひとつ興味深いことがあります。それは、JPIC の組織を吟味することです。管区や管区長協議会の大半は、JPIC の重要な活動を具体化するプログラムを作成してきました(たとえば、JPIC 担当室や文書管理部の設置、貧しい人々の権利を守るためのネットワークと国際組織の育成、JPIC の講座やワークショップの紹介など。)私たちはすでに、JPIC 設立の段階から、JPIC を強化する段階に移行しているように思われます。これらの組織の存続を保証し、それらを強化するために働くことは大切ですが、JPIC 活動を単に組織化することで満足してはなりません。むしろ私たちに求められているのは、人々や教会に対して預言的な声となることであり、平和の原因や環境保護を促進する預言的な振舞いをするように彼らに働きかけることです。そのためには、絶えざる識別と、これらの諸問題に取り組む社会運動との絶えざる対話が必要です。私たちは、フランスカンズ・インターナショナル(FI)、平和運動や環境保護運動、世界社会フォーラムと協力するために、そして、フランスカン家族の国際的なネットワークの一員として活動する兄弟姉妹たちを支援するために改めて自分を捧げる覚悟がなくてはなりません。

最後に、JPIC 国際大会に出席する兄弟たちは、創立 800 年祭を迎える兄弟会に対して挑戦を投げかけるように意識的に努力する必要があります。この目的を達成するために、本大会の進め方は、ドイツ Vossenack で開かれた第一回大会の進め方と違ったものになるでしょう。本大会の基本となるのは、各地で疎外された人々と共に過ごした推進者たちや他の兄弟たちの体験であり、本大会は、疎外された人々に同伴し、彼らを団結させる方法を見つけることに重点を置いています。本大会に出席する兄弟たちは、新しい福音化の方法を模索し、それらの方法をすべての兄弟と分かち合います。そして、疎外された人々の目線で現実を見ることを学びます。800 年祭は、成功を祝うものであり、単なるお祝いであってはなりません。この JPIC 国際大会は、このメッセージを臨時総集会の代表者たちの心に焼き付け、800 年祭が真に刷新と再建のチャンスとなるようにしなければなりません。

この大会でクライマックスを迎えるプロセスを開始するために、ここで再びすべての推進者に、すでにお送りしたアンケートにお答えくださるようお願いいたします。アンケートにより集められる情報は、あなた方の管区の豊かな体験に基づくもので、できる限り、あなたの管区長協議会の体験に基づくものでなければなりません。アンケートの回答をできるだけ早くローマの JPIC 担当室にお送りください。

最後に、この大会に出席されるすべての兄弟に、このブラジ

ルでの会議の基礎となる次の文書を注意深く読んでくださるようお願いいたします。それらは、「現代のフランシスコ会の使命」(1973年、マドリッド)、「福音は私たちに挑戦する」(1983年、バヒア総評議会)、「主があなたに平和を与えてくださいますように」(2003年総集会総括文書)、「創立の恵み」(2005年、ローマ)です。

ローマ、JPIC 担当室

．プレゼンテーション

1 .養成と学問との関連における J P I C - 疎外された人々の視点からの考察 -

1) 前提 : カリスマの様々な次元の統一

初期・生涯養成と JPIC との間には単なるつながり以上のもの、むしろ、深い相互関係があります。養成が「全生活を巻き込んで行く、絶えざる成長と回心の道(養成綱領2)」に他ならないならば、また、その現実の環境(context)が歴史上世界に実在する兄弟共同体であるならば、正義と平和の価値と問題は、フランシスカン生活の重要な一部であり、JPIC を推進することは基本的にフランシスカン生活を推進することを意味します。

私たちは、福音を実践し、兄弟共同体において、また、現実の世界において福音を宣べ伝えるために小さき兄弟会を形成しています(養成綱領43参照)。したがって、養成と福音宣教と

の間には、深い統一性があります（養成綱領 84 参照）。ここにも、平和と和解を宣べ伝える内容と方法の双方において、正義と平和の基本要素が見られます。すなわち、私たちの兄弟共同体の中心にあり（養成綱領 18、28 参照）、フランシスカンの証しの中心にある（養成綱領 3 参照）宣布（proclamation）です。養成綱領は「生活様式」（forma vitae）を大変強調しており、私たちの養成はそれに向かって、また、その中で行われます。したがって、私たちは単にカリスマの「働き」とか「価値」とか「次元」について語っているのではありません。会憲にも養成綱領にも、JPIC はフランシスカン・カリスマの不可欠の部分として説明されています。私は、こうも言えると考えています。つまり、JPIC は、愛（charity）の本質的なダイナミズムを表している、と。

神を父と実感し、キリストの御跡に従うことは、サン・ダミアノでの「十字架に付けられた方」との出会い、そして「ハンセン病」患者との出会いによって、また福音に耳を傾けることによってフランシスコに示されましたが（養成綱領 36 参照）、これらの体験は、彼をすべての人々とすべての被造物の兄弟とさせるに至りました（養成綱領 37 参照）。それは、フランシスコにとって絶えざる回心の道、すなわち「自己中心の生活からキリストに徐々に一致する生活に移行する道」（養成綱領 38）であったのです。そして、私たちはまさにこの強固な土台の上に、養成と福音宣教と JPIC とを統合しているわけです。絶えざる回心の道が私たちをゆるしと平和と正義の可能な人間にし（養成綱領 83 参照）、被造物に対する神の原初のご計画を表明する

ように導いてくれるならば、福音を宣べ伝えるために「生活様式」(forma vitae)において成長することは可能です。

2)「生活様式」(forma vitae)の中で、また「生活様式」のために養成を施すこと

現代の養成が大きな関心を寄せているのは、人間の成熟、特に、人間関係および心理面での成熟ですが、それは当然のことです。個人的同伴に重点が置かれているのは、ひとつにはそのためです。情緒的に未成熟な人が多い昨今なので、このような点が強調されるのです。それと同時に、私は、本会が養成を私たちの独特な「生活様式」の中で、またそのために行うということを忘れるという危険を冒してはいないだろうかと自問しています。私たちの「生活様式」をきちんと顧みないで個人的同伴というものを強調することは、私たちの養成をますます一般的なものにするだけでなく、会の現状維持を助けることにならないかと私は危惧しています。実際、私たちの「生活様式」を深め、時代に即したものにしないならば、私たちは養成がなぜ必要なのかを理解できない危険があります。私たちは、ただ決まり切った形の修道生活のために養成しているのでしょうか。それとも、現代の教会と世界で、兄弟としていつも新しい形でキリストの御跡に従うために養成しているのでしょうか。私たちの養成は、現在の組織を維持するためでしょうか、それとも、未来に備えるためでしょうか。

私たちは兄弟たち及び志望者の人間的成熟さのことや、各管区の組織的な欠点を心配するあまり、1973年のマドリッド文書

(5) が述べていることを忘れてはいないでしょうか。そこにはこう書かれています：「フランシスコの書き物や他の資料からもわかるように、フランシスカンの生活の中心は、イエス・キリストとの個人的出会い、すなわち神への信仰体験です。祈り、兄弟愛、清貧、人々との交わりなど、どんな面から出発しても福音に根ざした生き方の基本は信仰なのです。・・・フランシスカンの生活の根底には、愛である神に対するユニークな信仰体験があることがわかります。」

私たちの福音的生活の中心にあるのは、唯一の主である神の首位性に対する信仰告白です。養成と福音宣教と JPIC は、フランシスカン生活の中心を兄弟として生きる上で私たちに同伴してくれます。フランシスカン生活とは、主が今日私たちに求めておられることは何かを知るために、そして、私たちのカリスマの新しい道を開くために、すべての善意の人々と協力して、社会の中でラディカルに信仰を生き抜くことなのです。

3) 疎外された人々と共に始める養成：ラディカルな信仰体験

この中心点を出発点として、貧しい人々や疎外された人々から始まる養成について述べるができると思います。信仰体験とは、貧しい人々の秘跡の中に現存されるイエスに出会い、従うことであると言えます。そして、この秘跡は私たちに、最初の貧しきお方であられる三位一体の神の神秘を見せてくれます。貧しい人として、貧しい人々と共に、貧しい人々の中で生活を分かち合うことこそが、私たちの文書が何度も述べているように、私たちフランシスカンの生活の中心なのです。ここで

問題にしているのは、選択の余地のあるものではなく、私たちの生活の中心のことであります。なぜなら、それは私たちのカリスマの新鮮さと真実から生まれるものだからです。

私たちは、この理想を実現していないという事実を謙虚に認めなければなりません。それは、私たちに一貫性が欠けているためばかりではなく、私たちのキリスト者として、また、フランシスコとしての生活の中心が十分に福音化されていないためでもあります。現代の歴史の中に神の御言葉を聞くことから始まる深い回心へと私たちは招かれています。それは、信仰と召命の恵みに新たに応えることができるためなのです。これこそは、「創立の恵み」の中で提案された識別の道ではないでしょうか。

この答を与えることのできる神学的な場とは、まさに貧しい人々の生活です。彼らは刷新への道、私たちだけでは明らかにできないと思われる道を私たちに示してくれます。貧しい人々こそは私たちの先生なのです。なぜなら、私たちは信仰体験の中で福音化されるからです。養成綱領 25 条はこの理想をよく表しています：「小さき兄弟たちは、神によって「ハンセン病」患者の間に導かれた聖フランシスコの模範にならば、貧しい人々の生活と境遇を選び取りながら、自分たちが彼らと同一であることを認め、圧迫されている人々、悩む人々、病人たちに奉仕し、また彼らから福音宣教してもらおう（cf. 会憲 66 § 1 ; 96 § 2 ; 97 § 1)。小さき兄弟は、すべての形態における不正と、この世界の非人間的な構造に鋭敏となり、それらをなくすため

に働く。正義と平和の道具、この世におけるキリストのパン種として、声なき人々の声となって、貧しい人々への明白な選択をする。」

信仰体験の中心から、貧しい人々を解放しようとする福音的な姿勢が生まれます。そうした信仰体験がなければ、私たちは観念的になる危険があります。観念的になると、貧しい人々を守り、彼らの運動について行くことはできても、ブルジョワ的なライフスタイルに居心地よく浸かってしまって、神の国を宣べ伝え、貧しく十字架に付けられたキリストに従うために必要なラディカルな姿勢を身につけることはできません。私たちの信仰生活が、私たちを福音化してくれる貧しい人々との分かち合いによって育まれるとはいえ、貧しい人々のための活動を促進することに甘んじてはなりません、仮にそれがどのように良い活動であっても、です。私たちは貧しい人々と共に回心し、誓願によってそうなることを約束した小さき者となることを学ぶのです。すなわち、「力も特権もない、もっとも小さな人々の間で生きる」(養成綱領 22) 者となることです。小さき兄弟たちを次のような人間にしてくれるのは小さきなのです:「すべての人を温かく迎え入れる。だれも除外せず、すべての人、とくに貧しい人と弱い人を愛する。そして、母のような思いやりで仕え、暴力を拒絶し、正義と平和のために働き、被造物を大切にする。」(養成綱領 21)

これこそは、実に兄弟共同体が共に歩む道なのです。すなわち、兄弟たちが「その中で、互いに耳を傾け、対話しながら生

きるとき、自分の必要を表わすとき、謙遜に互いへの従順において仕えるとき、また行いと言葉でもって神の国を宣べ伝えるために、神がどのようにかれらをお呼んでおられるかを一緒に探すときの、兄弟たちの態度」(養成綱領 23)です。そのような道は、教会の中で、裁くことも拒絶することもなく、正真正銘の徹底した福音的生活を捧げるように努める小さき兄弟として生きるように私たちを導いてくれます。これこそは私たちが教会に対して負っている義務であると同時に、私たちにできる最大の奉仕なのです。これこそは、私たちの生活 - 私たちの業ではなく、神からの呼びかけであり、賜物である生活 - を預言的に証しする支えとなるものです。

疎外された人々や貧しい人々(貧しい神の御顔を示してくださる貧しいキリストの秘跡)の視点から養成について考えなおすことは、私たちの信仰体験によって作られた生活の中心を福音化するように努めることなのです。最後に、御聖体に目を向けましょう。フランシスコは御聖体の中に、身を落として完全に御自身を私たちのために捧げてくださるイエスの中に示された神の謙遜を見えています。それは、私たちが無条件に神とそして人々に自分を捧げることができるためです。私たちが新しい関わりへと導かず、貧しい人々の記憶と預言を含まないような聖体祭儀は、単なる居心地の良い、繰り返しの宗教的儀式に過ぎません。私たちの聖体祭儀について考えてみましょう。私たちの聖体祭儀を福音的活力に満ちたものにしなければなりません。そうすることによって、貧しい人々の間での私たちの存在意義と奉仕の意味を再発見することができます。

4) いくつかの未解決の問題/今後さらに検討を要する問題

私たちの「生活様式」(forma vitae) - そこから、新しい天と地への希望をもって達成される和解と平和の、そして、正義に飢え渴く真に統合され、具体性を伴った靈性が生まれる - の根本的な統一について深く考えること。

JPIC の理想を、深い信仰体験に向かう場として、また、道として促進すること。つまり、神は主であり、すべてのものの中で、すべてのものを通してそう認識され、崇拜されるべきであること。正義と平和を促進するためには、この中心的な問題を避けて通ることはできません。正義と平和は、神の御言葉に養われ、御聖体と私たちの賛美によって養われます。そして、私たちは正義と平和を通して、主が現代人について何をお望みなのかを絶えず探し求めるのです。

兄弟共同体内で、疎外された兄弟についての現実認識を広めること。たとえば、文化の違いのため、金銭や物品の分かち合いがないため、修道士と司祭の区別のため、民族や言語やその他の結びつきのため、共同体内で任命された役割のため、文化のため、活動と奉仕のため、など。

生涯及び初期養成中の JPIC の活動が講座や知的なものにとどまらずに、むしろ、より啓発的なものとなるように計らうこと。それは、フランシスカン養成が総合的（ホリスティック）で、体験的で、実践的で、地域に根差し、生活と奉仕の新しい形態に開かれた（養成綱領 45 - 50 参照）ものとなるためです。まず、JPIC は、養成の中で示すこ

とと修道院の中での具体的な日常生活との間の隔たりを埋め、養成をより経験的で総合的なものにするのを助けることができます。この隔たりは今日では、しばしば恥ずべきで耐えがたいものとなっています。JPIC の本質的な要素を発見するように努力することは、より大胆で徹底的な新しい方法で福音と会則に忠実であるように私たちを導くことにつながります。

推進者としてのあなたの奉仕は、基本的に養成に関わるものです。なぜなら、あなたは兄弟たちと兄弟共同体を励まし、刷新の過程において彼らに同伴するように求められているからです。あなたは真の奉仕職に携わっていますが、その職務は頑固さと不信によってしばしば困難なものになっています。しかし、諦めずに真の奉仕を続けてください。また、JPIC の活動をしているからといって、それを口実に、兄弟たちと行う仕事から免除されているわけではないことを忘れてはなりません。このことに関して、いくつかの注意点を挙げてみましょう。

a. 生涯養成について：

JPIC のテーマと体験をあらゆる年代の兄弟と分かち合うこと。その際、荘厳誓願宣立後 10 年未満の兄弟と 40 歳から 60 歳の兄弟に特別の注意を払うことが大切。

兄弟共同体を形成する上で重要な立場の人 - 管区理事、修道院長、会計係、養成担当者 - に注意を払うこと。

さまざまな司牧活動に携わる兄弟に注意を払うこと。

私たちの経済運営や、資源・組織の使い方を見直し、必要

とあれば、変更すること。

b. 初期養成について：

養成学問担当総本部事務局と協力して、養成のあらゆる段階に見合った基本的で、段階的で、明確な計画を作成すること。

知恵と知性を駆使して時のしるしを読み取る方法について志望者に教えると同時に、霊性を個人のものとする風潮の現代において、人間全体および歴史の政治的な側面に対する情熱を育む方法を教えること。時のしるしを読むに当たっては、社会学と神学の両面から見る必要がある。

JPIC に携わる兄弟の能力を高めるような具体的な専門分野の研究を行うことによって、このような態度を身につける。これらはすべて、総長が会にあてた手紙「み言葉の薫り」(2005年6月13日)の中で呼びかけている精神で行われる。この精神は、真理を探究し、対話を促進し、現代の人々に仕えるようにと私たちに呼びかけている。現代の社会的、経済的、文化的現実を深く、真剣に研究するならば、私たちは常にこれらの現状を把握し、時代が突き付ける他の諸問題にも取り組むことができるであろう。

各管区や構成単位で、あるいは少なくとも諸管区合同の、または管区長協議会レベルで、共同体が貧しい人々の生活と直接の関わりを持ち、貧しい人々のために働くようにする。これらの共同体の基盤は、明確に目に見える形で選び取ったフランスカン生活であり、その中心は、御言葉と御聖体の中に神の御顔を探し求めることと、兄弟的な交わ

りである。選ばれた場所と生活様式は簡素で貧しいものが望ましい。そうすれば、物品を溜め込むのではなく分かち合いながら、共同体を維持し、貧しい人々を助けるために働く可能性が開けるであろう。志願期、修練期、及び修練期以降の勉学期間中のある時期に長期または短期で、志望者をこれらの共同体に受け入れることができる。

マッシモ・フサレリ

養成学問担当総本部事務局長

2 . 疎外された人々の視点から見た福音宣教と J P I C

1) 私たちの生活様式 (forma vitae) における J P I C

小さき兄弟としての私たちのミッションと召命とは、福音を告げ知らせること、神の国を世に知らせ、築くことです。そのためにこそ、私たちは存在するのです。福音宣教とは、まず、何かをする、たとえば、説教するとか、正義と平和とエコロジーのためや疎外された人々のために行動を起こすということではありません。福音宣教とは、私たち小さき兄弟にとって、私たちの生活様式を生きる、その生き方そのものなのです。すなわち、貧しく謙遜なイエス・キリストに従うその従い方であり、福音を証しするその証し方に他なりません。福音宣教とは、*professio vitae* すなわち「生涯をかけた誓い」です。「それは、ただやればよいというものでもなければ、兄弟性や福音生活への証しから切り離された仕事でもありません」(ヘルマン・シャルック、1994年「勉強に関する会議」Congress on Studies)。

ハンセン病者に出会い、彼を抱きしめたことがフランシスコを回心へと導いた重要で決め手となる出来事であったことは確かですが、最も決定的なことは、福音との出会いでした。それが彼の生活とミッションを決定的に特徴づけたのです。「いと高きお方が自ら、聖福音のフォルマに従って生活すべきことを、啓示してくださいました」(「遺言」)。

正義と平和とエコロジー、そして、疎外された人々のために

身を捧げることが、神の国のためにとっても重要であることを決して忘れてはなりません。それらは、福音と私たちの生活様式の一部に過ぎません。ですから、JPIC のために、特に疎外された人々のために献身的に働くということは、単にもう一つ活動が増えるとか、新たな活動を始めることではないのです。それは、私たちの生き方に属する問題です。(1994 年の)会議で示された抄録の中に、次のような一節があります：「正義と平和とエコロジー、養成、福音宣教などはいずれも、私たちのアイデンティティーとカリスマの、すなわち、小さき兄弟会の生活とミッションの根本要素であり、それは、私たちのすべての兄弟共同体に言えることです。」

福音宣教という視点から裁可会則を読んでもと、フランシスコが兄弟共同体の日常的な生活のあらゆる側面に注意を払っていることが分かります。それは、生活そのものが福音、すなわち神の国を告げ知らせるものとなるためです。フランシスカンの福音宣教とは、ひとつの在り方、福音を生きる生き方であり、兄弟的交わりの中での生き方、教会への属し方、世界と人々の真ただ中で小ささと平和と巡業するミッションを証するその証し方に他なりません。世界と人々の間においてこそ、私たちは平和な心と神の国の建設に貢献するという決意で、見せかけだけの純真さや敬虔だが受動的という態度を越えて、小さき兄弟としての在り方を追求するのです。各兄弟および各兄弟共同体の日常生活は、私たちと接する人々、特に貧しく、疎外された人々にとって福音とならなければなりません。(2005 年のアシジでの修練長会議、フェルナンド・ウリベ著「裁可会則の

現代に即した解釈」参照。)また、兄弟共同体においては、いかなる形の差別も排除しなければなりません。たとえば、修道士と司祭、年配者と若者、異なる文化を持つ兄弟の間に差別があってはなりません。

会憲は、生活による証しを福音宣教の第一の方法であると述べています。「これはすべての兄弟、すなわち聖職にある者にも信徒にも、説教者や祈りに従事する者にも、あるいは『労働者』にも、若者にも年寄りにも、健康な者にも病人にもできることである」(会憲 89)。この証しについて説明した箇所には、正義と平和への、そして、貧しい人々、社会の片隅に置かれた人々、抑圧された人々、苦しんでいる人々、病人たちへの兄弟たちの献身ぶりがいろいろと述べられています。そのうち特記すべき引用箇所は、昨日ルイス・カブレラ神父が列挙しました。

また、この2003年～2009年の優先課題が主眼としていることは、私たちが世界に派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体(Fraternity-in-Mission)、すなわち、そのカリスマの価値を軸として福音宣教する兄弟共同体としての生き方を一貫した方法で貫くことができるように助けることでもあります。

2) 私たちの生活とミッションの教會的な側面

「小さき兄弟会の兄弟性は、教會のただ中でその福音的召命を生き抜いています。福音宣教の使命を受けたのも、従事している場も教會だからです」(「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」90、1996年)。フランシスコは、自分の使命

(ミッション)が教会を助けることであることを理解していました。創立 800 年祭において私たちが祝うのはまさにこのことです。すなわち、教会がフランシスコと最初の仲間たちの提案した生活様式を受け入れ、認可してくれたことを祝うのです。教会がこの新しいカリスマを保証したいと思ったのは、その生活とミッションが素晴らしく、豊かなものであったからです。私たちはしばしば教会のことを自分たちの外側にあるもののように考えたり、危うく自分たちが教会に代わるものというイメージを打ち出そうとしたりします。あるいはまた、都合よく教区の司祭とあまり変わらないような振りをしたり、聖職位階制度にただ従順だけであったり、私たち独自の生活様式を手放したりすることもあります。

フランシスコは、いと高きお方が私たちに啓示してくださった福音的な生活様式に忠実であるために、十分な自由を保持するようにと私たちに教えています。フランシスコは、その当時教会が行っていたことをただ単に再現したのではありません。彼は、貧しく、謙遜で、十字架に付けられた主イエス・キリストに従うために、福音の基本要素を取り入れたのです。

疎外された人々について、第二バチカン公会議以降の教会は、少なくともその文書の中で次のように明確にしています：「(教会は) 貧しい人や苦しむ人のうちに、貧しく苦しんだその創立者の姿を認め、彼らの欠乏を和らげるよう努め、彼らのうちにキリストに仕えようと心がける」(教会憲章 8)。教会は、福音宣教に関するシノドスにおいて、福音宣教と人間の発展との間

には人類学的にも、神学的にも、福音的にも強いつながりがあることを認めています。教会には、何百万もの人々に解放を告げ知らせる義務があります（「福音を宣べ伝える」Evangelii Nuntiandi, 29-31）。ラテンアメリカの教会は、現在および未来のラテンアメリカの福音化について考察した結果、貧しい人々を優先することを決めました（プエブラにおける CELAM 会議）。

教会それ自体は、貧しい人々に特別の関心を抱き、正義の促進を志す修道者を抱えています。イエス・キリストにより近くから従うことを望む人は、何よりもまず貧しい人々を優先的に選択する気持ちがなくてはなりません。「キリストの愛に対する誠実なこたえによって、彼らは清貧の生活を送り、貧しい人々の権利を擁護するよう導かれます」（「奉獻生活」82）。そのような選択をするということは、個人的にも、また共同体としても、つましく厳しい生活様式を選択することを意味します。それはまた、不正を公然と糾弾し、自分のまわりで正義を促進するために力を尽くすことをも意味します。「貧しい人々に仕えることは、福音宣教の行為であると同時に福音的真正さのしるしであり、奉獻生活における絶えることのない回心を促します」（「奉獻生活」82）。

私たちは、小さき兄弟としてこのような奉獻生活の考え方を自分のものとし、教会のメッセージに対して心を敏感にしておかねばなりません。私たちは、貧しい人々の優先的選択を証しする独特の方法を持っていますが、それを教会の名で、教会との交わりにうちに、教会として行いたいと思っています。恐らく、

多くの教区や小教区が抱える具体的な状況においては、そのようなプロジェクトに真剣に関わろうとすればするほど、問題や意見の対立に直面するでしょう。しかし、教会の生活とミッションを助けることこそ、私たちの召命が本物であることを示す福音的な在り方であり、証し方なのです。

3) フランシスカンのかつ教會的な方法で疎外された人々を福音化する

「貧しい人々の叫びは、預言者であり宣教者である私たちに、彼らの側に与する勇気を持つようにと強く呼びかけています。それは、信仰の視点から神体験によって、彼らの闘いと団結に力を貸し、『社会的罪』の現状と根源を明らかにするためです。彼らの叫びは私たちに、信仰と生活を調和させることができ、貧しい人々を優先するという選択を生きた現実の中に取り入れ、それを私たちの福音的な生活様式の構成要素、すなわち、福音化する使命(ミッション)とすることができるような預言者となり、宣教者となるようにと促しているのです」(「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」154)。疎外された人々のもとに行き、彼らと共にあり、彼らの言葉に耳を傾け、彼らに仕えることは、私たちの宣教者としての召命を成す部分であるべきです。それは、私たちの兄弟共同体の特徴である「旅」に忠実であるしるしであり、私たちの流動性を示すものなのです。兄弟会の中においても、貧しい人々や疎外された人々のために福音的に働くその働き方はさまざまです。必ずしもすべての兄弟が、貧しい人々の間で、貧し

い人々と同じように生活するように求められているわけではありませんが、そのように求められている兄弟もいます。その可能性があるということは重要なことです。なぜなら、彼らは、兄弟会の名で、兄弟会との交わりのうちに、貧しい人々の中に入って行くからです。そのような体験は、小さき兄弟たちの生活における兄弟間の対話を豊かなものにしてくれるに違いありません。

疎外された人々との出会いは、新たな回心を生む恵みとなり得ます。すべての祈りや聖体祭儀が神体験になるとは限らないように、必ずしもすべての出会いが霊的な体験や神体験となるわけではありません。神の恵みと福音的な動機があって初めて、信仰の視点と祈りの姿勢があって初めて、私たちは疎外された人々の中に貧しい神の秘跡を認めることができ、彼らの中に、貧しく、苦しまれ、十字架に付けられ、やはり疎外されたキリストの御顔を見出すことができるのです。貧しい人々は、神学的な場となることができます。つまり、神の御言葉を解釈し、神の啓示をよりよく理解するのを助ける認識論的な場のことです。教皇ベネディクト 16 世は、その最初の回勅の中で次のように述べています：「進んで隣人に会い、その人に愛を示す心構えがあってこそ、神に対しても敏感になれる」と（「神は愛」 Deus Caritas Est, 18）。

貧しい人々は私たちに、信仰宣言と信仰の実践との間の一貫性に関して回心を促し、私たちが個人として、また共同

体として選び取った清貧の生活を見つめなおすようにと促しています。私たちは、歴史と現実とを貧しい人の視点から見るようにと求められているのです。

疎外された人々の福音化は、なによりもまず無償の行為であって、即効性や改宗を期待するものではありません。それは、生身の人間を相手にし、非人間的な状況を作り出したり、再生したりするような人間関係や制度の中で行われるものです。連帯の精神が私たちに求めているのは、社会が現実を抱える諸問題の重要性を十分に認識し、疎外された人々の人間としての尊厳を守るために最善を尽くしながら、彼らの条件を共有し、「この世界で、正義の提唱者として、平和の使者として、そして抑圧された人々の権利の擁護者として」生きることです。私たちは解放への途上で、彼らを励ます小さき兄弟となるのです。私たちは、フランスカン・カリスマの価値を証しすることによって、疎外された人々が現実に彼らの中にある神の国の価値をもっと意識して生きることができるようになるのを助けると同時に、新しい社会的・経済的秩序を建設するために、和解と平和と友情と正義への献身への道を歩む彼らを励ますのです。もし彼らがキリスト教徒ならば、彼らが教会となり、貧しい人々の教会を建設するのを助け、彼ら自身が持つ福音化の能力を伸ばすように助けることができます。福音的な貧しさを証しすることによって、私たちはまた彼らが、ラテンアメリカの教会が三つの面で示した福音的な清貧を選び取るのを助けることもできます。すなわ

ち：

- 神に心を開き、信頼する態度を持ち続けること；
- 他者との分ち合いと連帯の能力を育むこと；
- 簡素でつましい生活様式を選び、消費主義を避けること。

疎外された人々を福音化するためには、貧しい人々を優先的に選択することが必要です。私たちの兄弟チェルソ・テイクセイラ（Celso Teixeira）は、フランススコが選択した貧しい人の優先は現代のラテンアメリカが取り入れたようなものではなかったと言っています。しかし、本会は、会憲の中で、総集会の中で、そしてその文書の中で、貧しい人々の優先を大事にしています。それと同時に忘れてはならないことは、神の国の扉は誰にも閉ざされてはおらず、福音はすべての人のためのものであるということです。優先的であるということは、排他的であるという意味ではありません。裕福な人や権力のある人、特に富の蓄積と不正な社会構造の維持に責任のある人々は、貧しい人々を優先的に選択するように求められています。それこそは、彼らも救われる道なのです。会憲は次のように述べています：「兄弟たちは地位のある人、権力のある人、裕福な人に出会うとき、彼らを軽蔑したり、裁いたりしてはならない。むしろ、彼らに悔い改めを勧め、すべての良いものを、貧しい人々の中に常に現存しておられる、主なる神にお返しするよう、謙虚に忠告を与える」（98）。裕福な人が貧しい人々や疎外された人々への連帯感を示す方法はいろいろあります。彼らに比べると、貧しさを証しし、平和を追

求し、貧しい人々や疎外された人々のために献身的に働くその姿勢が一貫しているならば、私たちは信頼されるはずです。でももし受け入れられない場合には、「兄弟たちは、祈りと忍耐において待望しなければなりません」(会憲 99)。

4) 疎外された人々の視点から見た組織としての私たちの福音宣教

私たちのカリスマは組織以上のものですが、活動をするためには、それを支え、生命力のある効果的なものにする組織や具体的な手段が必要です。しかし、そうした組織や手段が時代のニーズに合っているか、フランシスカンの使徒職にふさわしいものであるかどうかを吟味する勇気を、私たちは持たなければなりません。

昨今では、小教区を離れて、原初の福音宣教の形態、すなわち、もっと巡業的な形態に戻り、新しい福音宣教の方法を探すべきだということが言われています。会の様々な文書は、この問題について、800年祭プロジェクトと合わせて検討するようにと私たちに求めています。福音宣教のための管区計画を立てることは、そうした問題を検討する具体的な良いチャンスとなるでしょう。

会憲(第84条)及び総則(第51条)は、小教区の中で、あるいは、その他の教会関係の施設や教育機関において、教説活動、社会福祉活動、専門職などの知的・実践的活動を通して福

音宣教の仕事をする可能性について述べています。疎外された人々の視点から見れば、これらの可能性のいずれも、正義と平和とエコロジーへの真剣な取り組み、すなわち、いのちを守り、貧しい人々や疎外された人々を守るような取り組みを含み得るものです。

小教区においては、貧しい人々に対する感受性を養うことができます。それは特に、すべてのキリスト教徒が貧しい人々を優先させ、平和と正義のために働き、絶えず被造物を尊重し、そして、疎外される人々を生み出す原因を突き止めることのできるような人となるのを助けるような司牧的アプローチを考え出すことによって可能です。これらのテーマと価値観を、私たちの典礼や要理教育や一般教育活動のテーマとすることもできます。また、私たちの小教区は、JPIC の仕事を組織することもできます。すべてのキリスト者共同体は、自らが抱える貧しい人々の世話に心を配り、すべての貧しい人々に対して寛大であるべきです。教皇の最初の回勅「神は愛」(Deus Caritas Est)はこの方向性を示しています。

私たちの学校では、若い人たちが及びすべての教育界を、平和と正義とエコロジーを大切にする価値観の中で、また、貧しい人々や疎外された人々との連帯感を持つように養成して行くことが求められています。誰をも疎外することのない開かれた社会を夢見ることのできる総合的な教育計画を作り上げることが私たちの大きな課題です。私たちの学校は、疎外を助長するような社会のモデルの一端となるような施設であってははいけない

のです。

5) 挑戦 (課題)

800 年祭を迎えるにあたり、本大会の精神で作り上げるとするならば、どのような新しい形態の福音宣教が、あるいは、派遣されて宣教する使命を持った新しい兄弟共同体が生まれるでしょうか？これは、個人の活動や自発性の問題でもなければ、これらの新しい形態を生み出す決め手となる個人的なカリスマの問題でもありません。フランスカン・カリスマと時のしるしに対する創造的な忠実さを持った派遣されて宣教する兄弟共同体の問題であり、生活様式、宣教者の情熱、新しい使徒職の方と表現形式、そして、私たちの生活様式の重要性に関わる問題なのです（兄弟マッシモ・フサレリによる考察を参照のこと）。

JPIC や疎外された人々のために真剣に働きながら、フランスカン的で預言的な福音宣教に対する私たちの関わり方（commitment）の質を確かなものにするにはどうすればよいのでしょうか。私たちを取り巻く現代の環境は複雑で、言葉で率直に説明するだけでは不十分です。福音的で霊的な視点から、あるいは、具体的な視点から、時のしるしを読み取り、解釈することが是非とも必要です。善意があっても、それだけを基盤にして具体的な疎外の状況や暴力、不正、社会の割れ目の中に入って行くことはできません。固い決意をもって生涯養成を受け、

知的、教育的、方法論的な研究に励む必要があります。

会のすべてのレベルにおけるさまざまな推進活動（アニメーション・サービス）間の協力体制を強化するにはどうすればよいでしょうか。たとえば、執行部、養成、福音宣教、JPIC、対話、など。アニメーション（推進）組織のレベルでの協力以外に、価値観や内容や考え方のレベルで一致を促す方法があるでしょうか。JPIC の重要性、疎外された人々を優先的に選択することの重要性、対話や福音宣教と養成の重要性は、兄弟各人及び兄弟会全体のあらゆる生活とミッションを通して相互に関連し合うものでなければなりません。

ネストール・イナチオ・シュウェルツ神父
福音宣教担当総本部事務局長

3. 総長のプレゼンテーション

このテーマについてお話することは私にはやさしいことではないことを告白いたします。私たちが体験している危機は、チャンスであると同時に困難でもあると承知していますが、それが、私たちの暮らしている生活の不安や不確かさや欠陥を言葉や説教で言い繕うように私たちを仕向けることが時としてあることを思うと、非常に不安になるか、パニックになってしまいます。言葉や説教は、少なくとも最初は美しく、革新的なのですが、本格的に試してみる前に、間もなく古臭く時代遅れのように聞こえるテーマになってしまいます。なぜなら、それらは私たちの実生活からかけ離れているからです。

ペドロ・カサルダリガ(Pedro Casaldaliga)は、私たちは「足で考えることも」必要だと言っています。それは、考察の結果、私たちの行動と思考が混乱しないため(時々、行動と思考がかなりずれていることがあります)であり、私たちの言葉がうつるなものにならないで、生きた言葉になるためです。

不安におののきながらも、この大会を組織して下さった方々及び私の呼びかけに応えて下さったすべての方々への深い感謝の心をもって、私は、フランシスコのように、現代の疎外された人々を温かく迎え入れ、彼らのうちに貧しく、十字架に付けられたキリストの御顔を思い浮かべることができるようになる心の変化(回心)についてお話したいと思います。

そこで、私はまず、フランシスコをしてハンセン病者を抱きしめさせ、彼らの間に導き入れた経緯についてお話し、それから、現代の疎外された人々に近付くために、私たちの生活と歩むべき道に目を向けたいと思います。会の創立 800 年祭を祝う準備の最初の年に識別というテーマでこうして皆で集まっていることを考えますと、このように歩みを進めて行くことは適切であると私は思っています。

「主よ、あなたは私がどうするのをお望みですか？」(3 人の伴侶の伝記 6)

ピエトロ・ベルナルドーネの息子がいつ回心したのが、その正確な日にちを私たちは知りません。おおよそ 1206 年ではないかと言われています。しばらくの間、フランシスコは探し求め、「主のみこころを待ちました」(「大伝記」1:3)。そのような状況において、フランシスコは何度も何度も「主よ、私が何をすることをお望みですか？」(「3 人の伴侶の伝記」6、「大伝記」1:3)と問いかけ、「私の心の闇を照らしてください」(「十字架上の主の御前で捧げられた祈り」)と執拗に願いました。このような長い道のりを経た後、彼は晩年に自分の人生を振り返って、こう述べています：「主は、私・兄弟フランシスコに、償いの生活を、次のように始めさせてくださいました。私がまだ罪の中にいた頃、ハンセン病者を見ることは、余りにもつらく思われました。それで、主は自ら私を彼らの中に導いてくださいました。そこで、私は彼らを憐みしました。そして、彼らのもとを去った時、以前につらく思われていたことが、私にとって

魂と体の甘味に変えられました。こうして私は、その後しばらくとどまって、世俗を出ました」(「遺言」1-3)。

フランシスコは彼の回心のプロセスの「最初の段階」とも言うべき出来事をこのように述べていますが、それが終生続いていたことは、彼の書き物や彼の伝記作家の証言によって明らかです。チェラノは、こう書いています：「それというのも、習性となったものを捨てるのは極めて難しく、一度魂に注ぎこまれたものは、容易にその力を弱めることはできないからです」(1 チェラ 4)。

しかしながら、この出来事、すなわちハンセン病者との出会いを単独で捉えてはなりません。この出来事は別の5つの出会いと密接に関連しているのです。つまり、自分自身との出会い(「3人の伴侶」4、「大伝記」1:2、「無名のペルーシア伝」5、「3人の伴侶」6、「1 チェラ」6 参照); 貧しい人との出会い(「3人の伴侶」3 参照); 十字架上の主との出会い(「3人の伴侶」13 参照); 福音書との出会い(「3人の伴侶」25 参照); そして、兄弟たちとの出会い(「3人の伴侶」27 参照)です。これらの出会いはすべて、フランシスコの召命の根底にあるものです。より正確に言うならば、最初の主の呼びかけに対する、時間をかけたフランシスコの応答の根底にあるものです。これらの出会いのいずれも、他の出会いなくしては、意味をなさない、あるいは少なくとも不完全なものです。

また、主はこれらのどの出会いにおいても、フランシスコの

あの質問に答えておられます。実際、一つの出会いを他の出会いとの関連において読むと、主は、まるでフランシスコの「主よ、あなたは私がどうするのをお望みですか？」という問いかけに対して、次のように答えているかのようです：「フランシスコよ、本当の自分を見つけて、兄弟的な共同体を作り、貧しい人々や社会の片隅に置かれた人々や疎外された人々と共に、使徒のような生活（forma vitae）を送ることによって、私の教会を建て直しなさい。私の教会は見ての通り、今にも崩れそうなのだ。」

フランシスカンの「生活様式」（forma vitae）の根本要素は互いに密接に関連しています。すなわち、主の最初の使徒たちのように、兄弟的な共同体を作って、最も小さき人々や疎外された人々と深く交わりながら暮らすことです。この「生活様式」を受け入れるためには、頻繁に「洞穴」に行き（1 チェラ 6）、自分の来し方を振り返る（「3人の伴侶」6 参照）ことにより、本当の自分に出会う必要があります。

よく知られているように、フランシスコは最初、それが何のことなのか分かりませんでした。なぜなら、聖ボナヴェントゥラが述べているように、彼は自分に対する神のご計画を知らなかったからです（「大伝記」：2、3 参照）。フランシスコはサン・ダミアノの教会を物理的に修復することだと考えて、それに着手しました（「3人の伴侶」13 参照）。しかし、主は少しずつフランシスコの心を照らし、「どのように行動すべきか」（1 チェラ 7）を示されました。それで、彼はすぐにそれが生活を

徹底的に変えることだということに思い至ったのです。生活を変えるためには、それまで彼が愛し、願ってきたものを軽蔑し、捨て去るほどの内的な変化を経ることが必要でした。このような経過を経て初めて、それまでつらく思われていたことが甘味なものに変わることができたのです（「3人の伴侶」11 参照）。このようにして初めて、「パン種」、すなわち、教会と社会を変革し、それらを内側から建て直す力が生まれるのです。

フランシスコが根本的かつ究極的に選択したキリスト

フランシスコの生活の中で根本的な選択（founding option）とは何だったのでしょうか？フランシスコがハンセン病者を抱きしめ、接吻したその背景には何があるのでしょうか？それは単なる社会的な、あるいは人間愛に基づく選択でしょうか？それとも、根本的にキリストを選び取ったのでしょうか？これらの間に答えるために、前に引用した文章に戻りましょう。

フランシスコは、「主よ、あなたは私がどうするのをお望みですか？」と尋ねる前に、主が次のように語りかけられるのを聞いたのです：「フランシスコ、あなたにより多くのことをしてあげられるのは、主人か、それともしもべか？金持ちか、それとも貧乏人か？」これに対し、フランシスコが「主人や金持ちです」と答えると、主はまた次のように問いかけられました：「それならなぜあなたは、主人をすててもべにつき、金持ちをすてて貧乏人につこうとするのか？」と（「大伝記」1:3）。

フランシスコが召し出しを感じた最初の頃は、伝記作家たち

のいわゆる「神の恵み」(「大伝記」1:3 参照)とか「天から与えられた賜物」(1 チェラ 5) しかなかったことが分かります。フランシスコ自身、後になって、ハンセン病者との出会いについて、「主は自ら私を彼らの中に導いてくださいました」と述懐しています。これこそは、すべての召命の体験なのです。エレミヤの場合は「主が私を唆し」(The Lord seduced me.) であり、アモスの場合は、「主は家畜の群れを追っているところから、私を取り、言われた」(アモス 7:15) となっています。同じようなことが最初の使徒たちにも起こります。「イエスは、『私について来なさい』と言われた」(マタイ 4:19)。このような主からの呼びかけに対して、フランシスコは、預言者たちや最初の使徒たちと同じように、即座にこう答えます：「これこそ、私が望み、探し求め、心からしてみたいと熱望していたものです」と(1 チェラ 22)。

フランシスコがプーリアへの途上で見た夢について書いた後にボナヴェントゥラが述べていることはとても重要です。「自分の土地へ帰りなさい」との主の呼びかけに答えて、フランシスコは「朝になると、喜びに満ちて、思いわずらうこともなく急いでアシジに帰った。すでに従順のかがみとなったように、彼は、主のみこころを待った」とボナヴェントゥラは記しています(「大伝記」1:3)。ここに記されているのは、まず主からの召し出しであり、それに対する小さき貧者フランシスコの意欲に満ちた素早い応答です。ポルチウンクラで福音の教えを聞いた後のフランシスコの行動について、チェラノが記したこともとても重要です。チェラノによれば、フランシスコは、「喜びにあ

ふれ、自分がいま耳にしたばかりのためになる言葉を実現しようと気負い立って」いました(1 チェラ 22)。

一方、回心の最初の段階での主の召し出しに対するフランシスコの応答を考えると、フランシスコは明らかにしもべに従うことよりも主に従うことを選び、貧しい人に従うよりも金持ちに従うことを選んだと言えると思います。彼の選択は、信仰の選択です。彼が根本的に選択したのは、後に自分の生涯のすべてとなる主に従うことでした。「わが神、わがすべてよ」「全き善、最高の善、・・・十全の富、富のすべて」(PrG 1ff)。

フランシスコが自らハンセン病者を抱きしめ、「彼らの中に入って行った」ことは、単なる憐みや親しさや連帯を示すジェスチャーではありませんでした。小さき貧者にとっては、はるかにそれ以上のものだったのです。それは、貧しく、十字架に付けられたキリストを抱きしめることであつたのです。なぜなら、聖ボナヴェントゥラが述べているように、「人々の中に貧しさのしるしや欠乏のしるしを見ると、彼は、敬虔な心のやさしさをもって、キリストに彼らのことを訴えるのであつた」(「大伝記」8:5)。ハンセン病者を抱きしめるということは、キリストの生き方に似た生活様式を選び取ることであり、そのことをフランシスコは、後にポルチウンクラで福音書の朗読を聞いた時に悟つたのです(1 チェラ 22 参照)。最も小さき人を抱きしめるということは、フランシスコにとっては、主を抱きしめ、主である御子と「その貧しい御母」とが選び取られた「至高の貧しさ」(highest poverty)という生活様式を選び取ることと不可分の

ことなのでした。「ハンセン病者を抱きしめる」ということは、同時に、「兄弟たちを抱きしめること」(私たちの生活の兄弟的な側面)とも、また、「聖なるローマ教会の教えに従って生きる貧しい司祭」を抱きしめること(私たちの召命とミッションの教會的な側面)とも不可分のことでした。つまり、「ハンセン病者」や「疎外された人々」を優先的に選び取るということは、心の転換(回心)があって初めてできることであり、それによって、私たちは「何も持たずに」(sine proprio、裁可会則 1:1)、兄弟たち及び教会との交わりのうちに生きることができるのです。フランシスコをハンセン病者の中に導かれた主は、彼に兄弟たちを与え、「聖福音の Forma に従って」(「遺言」14) 生きるべきことを示された主と同じ主であり、聖なるローマ教会の教えに従って生きる司祭たちに対する「厚い信頼」を彼にお与えになった主と同じ主なのです。

現代の疎外された人々を抱きしめるために解放する預言

上に述べたような私たちの生活のあらゆる側面を考慮に入れるならば、「ハンセン病者」を抱きしめ、疎外された人々を選び取るということは、現代のように、北と南に分断され、富める少数の人々とほとんど何も持たない貧しい多くの人々とに分断された世界では、本当の意味で預言的な態度であると言えるでしょう。なぜなら、それによって、神、すなわち、人類を愛してくださったナザレのイエスという神、多くの疎外された人々の苦しみをつぶさにご覧になり、彼らの叫び声を聞かれる神について語ることになるからです(出エジプト記 3:7-9)。

預言とは受けとめて応えなければならない賜物です。奉獻生活の預言者的特徴は、「聖霊によって神の民全体に伝えられる、キリストの預言者としての務めにあずかる特別な形で現れます」(「奉獻生活」84)。私たちは小さき兄弟として、この働きに本格的に与っているのです。私たちは預言を解放するように求められていますが、それは、開かれた寛大な心で賜物として預言を受け入れ、それに応えることなのです。このようにしてこそ、私たちは人類に対する神の情熱的な愛に完全に呼応し、神のご計画に熱意を持ち、すべてを神と神が「優先される」人々のために奉仕できるのです。

ここで再度念を押しておきたいことがあります。それは、言葉によって希望を告げ知らせ、不正を糾弾するこの預言が力を持つためには、それが深い連帯と、神の国を中心とする生活の証しと、神と神のご計画との深い交わりと、そして、少なくとも私たちの場合には、兄弟共同体の中で深く生活を分かち合い、教会と「聖なるローマ教会の教えに従って生きる」人々と深く交わることから生まれたものでなければならないということです。このようにしてこそ、私たちの「預言的な言葉」は、人々の心に届くことができ、彼らの生活を新しい可能性へと広げ、一人一人が築いてきた自己中心的な防壁に異議を唱えることができるのです。このようにしてこそ、私たちの「預言的な声」は、教会の人々を導き、彼らに、時には組織や制度や矛盾の中でぼかされてしまうイエスのご計画の本質を悟らせることができます。このようにしてこそ、私たちの預言は、世界に訴え、不正を糾弾し、すべての善意の人々に心と力を一つにして、神

のご計画に沿った「新しい世界」を築くようにと呼びかけることができるのです。

現代の疎外された人々

現代人は「十字架に付けられた人々」であり、非常に多くの十字架に付けられた人々が、疎外された人々の世界を形成しています。世界の富みを生み出す能力が増し、社会が人々や諸民族の尊厳と権利に対する認識を深め、諸民族間のコミュニケーションと資源の分かち合いの可能性が開けて来てはいるものの、富の増すリズムは、富と権力を持つ者の富に対する征服欲をも増幅させ、それが、疎外される人々の数をさらに増やす原因となっていることは否めません。

疎外された人々の世界を形成しているのは：

社会の片隅に置かれた人々、路上や駅とか公園のベンチで寝ている人々です。彼らを、私たちは私たちの体制に合わないという理由で寒空に置き去りにし、締め出しているのです（「もしもあなたが体制に合わないならば、あなたも結局は体制から締め出されるでしょう」）。

何百万人もの失業者たち。仕事のない若者や年配者が方向を見失っています。

何百万人もの慢性疾患者たち（エイズ患者、鬱の人、身体障害者）及び何百万人もの薬物依存症者たち。彼らは死を待つ以外に選択肢を持ちません。

大勢の老人や見捨てられた人々、虐待されてボロボロになった大勢の女性たち、子ども時代を奪われ、生き延びるた

めに物乞いや労働や肉体をひさぐことを強いられた大勢のストリートチルドレンたち。

文化的アイデンティティーを奪われ、天然資源を奪われ、自由も奪われて、発展することもできない貧しい国々。

経済的に困窮する人々はみな、人間としての労働の実りにあずかることを拒否され、すべての人の財産として神がお与えくださったものにあずかることを拒否されて、疎外されるのです。また、個人的・社会的な罪の中にあつて、道徳的・精神的に悲惨な生活を送っている人々も疎外されているのです。多くの人々が基本的人権を尊重されないような悲惨な社会状況に置かれて暮らしています。生存ぎりぎりの悲惨な生活を送っている人々はみな、おそらく、自分が人間として占めるべき場というものを知らずにいるでしょう。疎外された人々の世界を形成するすべての人、あるいはすべてではないにしても、彼らの中のかなり多くの人たちが、貪欲と搾取と抑圧の犠牲者です。これらの疎外された人々のグループに、さらに、自分の体験しているさまざまな苦しい状況のゆえに自らを疎外する人々をも加えなければなりません。

この疎外された人々の世界は、日々増大し、(地球上の総人口 50 億人のうち) 極貧の中に暮らす人々の数は 18 億人に、読み書きのできない人々の数は 15 億人に達しています。そして、地球は日々、35,000 人ももの飢え死にする子供たちの血で肥沃化されているのです。

疎外された人々を私たちはこのように抱きしめます

私たち小さき兄弟は、昔モーゼが呼ばれたように、疎外された人々を「解放」し、疎外の状況から連れ出す（出エジプト記 3:10 参照）ために最大限の努力をするように呼ばれています。私たちは特に、フランシスコのように、彼らを抱きしめ、彼らに思いやりを示すように呼ばれているのです（「遺言」2 参照）。

彼らに優しく接し、彼らを抱きしめる（優先する）ことは、他者の不幸をある意味で自分のものと捉えて、理解し、和らげることです。フランシスコは「病人と共に苦しみ、苦難のうちにある者と共に悲しむ」（「3 人の伴侶の伝記」59）すべてを知っていたと言われています。疎外された人々を抱きしめ（優先し）、彼らに優しく接するということは、漠然とした感情ではなく、二人の人間が同じ運命を分かち合い、感じるように導かれる深い人間関係なのです。フランシスコはハンセン病者に憐みを感じていたので、彼らのもとに行き、彼らと共に暮らし、「神のために彼らを一心に看護しました。それは、あらゆる汚れをきれいに洗い落とし、その傷のうみを拭い取るようなものでした」（1 チェラ 17）。

他者の運命を、疎外された人々の運命を自分のものとするのがどうすれば可能なのでしょうか？フランシスカンの源泉資料を読むと、「身体的苦痛によって苦しんでいる人々に対する」（「大伝記」8:5）フランシスコの優しさの源は、彼に対する「主の憐み」（1 チェラ 26）を賛美していたことと、すべての人に対して「慈しみ深く、憐みに満ち」（ヤコブの手紙 5:11）、その

御子を私たちの下に遣わされた主についていつも深く思いめぐらしていたことに由来しています。御子は、聖母マリアの胎内で人間となられ、「十字架の苦しみを堪え忍ばれました」（「訓戒の言葉」6:1）。

私たちの場合も、私たち一人一人に対する主の憐みの神秘と
言うべきこの体験から出発して、うわべだけの見せかけではない深い優しさを他者に示しましょう。この神秘体験だけが、私たちをハンセン病者と共に生きるハンセン病者、貧しい人々と共に生きる貧しき者、疎外された人々と共に生きる疎外された者としてくれるのです。そして、彼らの下に行って、彼らと共に暮らし、彼らに仕えることを可能にしてくれるのです。なぜなら、これこそは、「優しさを示す」とことと「彼らを抱きしめる（優先する）こと」の本当の意味だからです。

多くの兄弟たちは、この 800 年の間、疎外された人々を抱きしめ（優先し）て来ましたが、それは今も続けられています。時代の変化と共に、疎外された人々を抱きしめるそのやり方も変化して来ましたが、しかし、その時代に合ったやり方でハンセン病者を抱きしめる（優先する）ことによって、フランシスコのハンセン病者への憐みを実践してきた兄弟たちがいつもいたということ、私たちは知っており、それに対し深い感謝の念を覚えます。現代で、この抱擁（優先）を具体化する事例を挙げるとすれば、それは次のようなものになるでしょう。

キリスト教徒が大半を占める国々と、イエスの使徒たちが迫害された国々で、諸宗教間の対話のために働く兄弟たち。

人間は互いに違っていても共に生きることができることを証ししながら、多文化的な兄弟共同体を形成する兄弟たち。紛争と暴力のただ中で、人々の間に深く分け入って暮らすあらゆる世代の兄弟たち。彼らは、他の人たちが去ってしまっても、また、彼らだって去ることはできるのに、そこに踏みとどまって、生命の危険を顧みず、疎外された人々との徹底した連帯のしるしとして、殉教をも厭わない場合が多いのです。

人権を擁護し、多くの場合、社会構造を変革しようと努めながら、さまざまな形で連帯し、協力する兄弟たち。

疎外された人々と私たちを隔てる壁

疎外された人々を抱きしめる（優先する）兄弟たちの事例は多様です。多くの兄弟がハンセン病者やエイズ患者、薬物依存症者、ホームレスの人々のために働いていることは知っています。しかし、疎外された人々を抱きしめたい（優先したい）という願いと、それが実際に在り方とプロジェクトに応用されている現実との間には、多くの場合、隔たりがあるのです。この隔たりのゆえに、私たちは悩み、何らかの形で、私たちが本当に「何よりもまず」神の国を徹底的に選び取り、貧しい人々を優先しているかと自問しています。この隔たりが、理想の具体的な実現を妨げているのです。

構造的な障害もあります。いくつかは、新自由主義的な経済システムとその文化から生まれて、私たちの考え方に浸透し、私たちの態度や基準を左右しています。そして、それがなけれ

ば預言的な行動をとることが不可能なような福音に基づいた批判的な態度をとろうとする私たちを妨げるのです。その他の障害は、管区やその他の構成単位の構造そのものや組織形態から生まれており、それらはしばしばあまりにも硬直していて、時代の要請に対応する柔軟性を持っていません。そのせいで、新しい挑戦に応えるために必要な創造性が損なわれています。また、私たちの管区や構成単位の経済状況と養成のプロセス自体が、多くの場合、疎外された人々の「仲間として、また友として」生きる妨げとなっています。それどころか、これらの疎外された人々との真の連帯を阻むような「保護された」スペースを作り上げてしまうのです。

その他にも、預言の障害や妨げとなるものが奉獻生活そのものから生まれています。中でも、重要と思われるものを次に挙げてみましょう。

さまざまな顔を持つ不安。たとえば、組織の計画や宣教計画を立てるにあたってリスクを恐れること；新しいことや違うものに直面した時の不安；権力を失うことへの恐れ；疎外された人々のために真剣に取り組むことに伴う不安定さへの恐れ、など。

グループとしての預言的な行動やそのメンバーの預言的な使命を麻痺させるような内部の意見の対立や不和。

管区間の真の協力の欠如。一部の修道者たちの共同体のライフスタイルが疎外された人々のそれとかけ離れている。

中でも最も、疎外された人々と私たちを隔て、彼らを優先す

ることの妨げになっているもの、それは私たちのライフスタイルです。私たちは次のような時、疎外された人々とかけはなれてしまうのです。

必要なもので満足することが美德ではなくなり、貪欲が頭をもたげられる時。

貧しいことや貧しい人々と共にいることを心地よいと思わなくなり、自分の持っているものや他人の評価で自分を測る時。

自分に与えられるものを、それも必要なものや良いものだけでなく、最高のものまで当然の如くに受け取る時。

欠乏に備えるためと正当化して、自分自身を守るために、福音書の戒めに背き、安全を求め、「自分の倉庫に穀物」を蓄えようとする誘惑に負ける時。

場所や消費のレベルが自然の成り行きで変わっても、友人関係や社会関係の変化を伴わない時。

つまり、疎外された人々のためと言いながら、それが私たちの生活と関わりのない「知識だけの『空しい』言葉になった時、それらの言葉を利用して、言葉を守るためにイデオロギーをつくりあげてしまう時、私たちは疎外された人々とかけ離れてしまうのです。

私たちと疎外された人々の間に橋を架ける

私たちを疎外された人々から隔てるものを列挙しただけで満足してはなりません。それを課題と受け止め、変えなければならぬことは何かを探り、さらに、預言の賜物を解放し、すべ

での疎外された人々を抱きしめる（優先する）ために、私たちはどのように変えなければならないかを探る必要があります。

これに関連して、私の深い信念をはっきりと申し上げたいと思います。変えることに「決心した」というだけでは、変化は訪れません。深い変化は、御言葉を通して私たちに語りかけられる主の霊に心を開いた結果訪れるものです。主の霊は、兄弟共同体の識別の中に現れ、私たちに問いかけることによって私たちを導いてくださいます。その問いかけは、疎外された人々と接触することによって私たちの心に芽生えるのです。変わるためには、霊的な調和が必要ですが、それが私たちには時として欠けています。恐らく変わるための究極の理由、変わるのがとても難しい理由を探さなくてはならないでしょう。また、変わるためには、自分自身と自分を取り囲む現実を厳しく分析する必要があります。自分の拠って立つ源を無視して、闇雲に変わればいいというものではないからです。

このような背景を認めた上で、疎外された人々との懸け橋を築くために必要な変化を列挙してみましょう。

自分の限界（年齢や人数の問題など）を認識するように私たちが仕向ける現実主義を身につける必要があります。しかし、それがために、預言的自由をもって生活様式と神の国を宣べ伝えるにふさわしい「宣教者的な」在り方を識別することが妨げられるような現実主義であってはなりません。

今年が会の創立 800 年祭を祝う準備の最初の年であり、識

別のために捧げられた年であることを考えると、私たちの「生活様式」の根本要素と「時のしるし」と「場所のしるし」について深く思いめぐらすことが私たちには求められています。それは、フランシスカン・カリスマが私たちに投げかけている挑戦と疎外された人々の叫びによりよく応えるためであり、このようにして、会の真の「再建」に取り組むことができるためです。

内面的に自由で感情のこもった効果的な「巡業の旅をする者」の精神で、新しい宣教地（新しいアレオパゴス）に向かう努力をしなければなりません。それは教皇も勧めていることで、現在自分が手にしている使徒職のどれかを手放す心構えが必要です。私たちは、「忘れ去られた修道院、つまり、そこでは美しさや人間としての尊厳が相変わらず損なわれている非人間的な修道院」や（2003年総集会総括文書37）辺境の地や辺鄙な土地へ惹かれるままに出かけて行きたいとの願いを持たねばなりません。それこそは、フランシスカン生活の持つ預言的な活力のしるしであり、フランシスコが私たちに残してくれたカリスマへの忠実さのしるしなのです。

私たちは、人々のそばにいるために、兄弟的共同体を人々の中に築き、その中で貧しい人々のために場所を提供するように努めなくてはなりません。

私たちは、神はすべての人の父であり、神の愛はすべての人に注がれており、神はすべての人を温かく迎えてくださるとの信念を、特に異なった宗教的伝統の人々に出会うところで、強く持たねばなりません。この気づきがあればこ

そ、私たちは対話と協力の姿勢を持つことができ、現代世界に生きるあまりにも多くの疎外された人々の状況を改善する力を増すことができるのです。

信仰と互いの文化的遺産を福音の教えに従って分かち合えるような国際的で多文化的な共同体の建設を促進しなければなりません。

貧しい人々のために生きるように導いてくれる新しい清貧の概念を持つことが必要です。それは、地球上のものを正しく分配するために働くように導いてくれる清貧のことで

す。消費主義に代わるような兄弟共同体を形成するためにもっと真剣に努力しなければなりません。それは、所有せざる人々、疎外された人々の利益となるように、乏しい資源を管理する兄弟共同体であり、自分たちの物質的（金銭的なものだけでなく）精神的資源の多くを疎外された人々のために使うような兄弟共同体です。それは、疎外された人々を受け入れ、彼らのために裕福な人々に語りかけ、裕福な人々に影響を与えるためです。

信念とガイドライン

今日でも、私たちの兄弟会の中には、現代の「ハンセン病者」や「疎外された人々」を進んで受け入れる多くの兄弟たちがいます。しかし同時に、私たちを疎外された人々から隔てる障害物が私たち自身の中に、また兄弟共同体の中にあることも感じております。もっと徹底的に貧しい人々や疎外された人々のために預言的な生き方を実践することができるためには、何か

変わらなければなりません。神の御言葉を読み、会の規則を読むと、イエスのご使命とそれを遂行されるイエスのなさり方を、疎外された人々との連帯という困難なプロジェクトに取り組むことにより、自分のものとするようにとの新たな呼びかけを感じます。今こそは、私たちの信念をもっとはっきりと表明すべき時です。すなわち、私たちの生活を方向づけ、具体的なプロジェクトを通して明確に表明すべき信念のことです。私たちはきっと「大きな新しい発見」をしたいと思います、それによって、私たちは、私たちの生活に預言的な側面が必要不可欠であり、それを表現する具体的な方法を作り出すためには大いなる大胆さと創造力が必要であることに「絶えず気づく」ようになるでしょう。現在、一般的な奉献生活が行っている考察の共通点を次に挙げてみます。

信念

1. 預言は、「奉献生活」及び私たちの「生活様式」の構成要素です。私たちの生活の預言的な側面に関する意識を喚起することは、聖霊の賜物であり、私たちはそれを受け入れ、それに応えなければならないと思います。
2. 疎外された人々及び現代の「ハンセン病者」を優先的に選択することは、私たちの生活の根本的な部分であると考えなければなりません。貧しい人々は私たちを福音化してくれ、私たちが神の御顔を発見し、私たちの兄弟共同体を刷新するのを助けてくれます。私たちの社会で「余分」と思われている人々のそばにすることが、すべての奉献生活者、特に私たち小さき兄弟に緊急に求められていることです。

- 3 . 疎外された人々を受け入れるということは、慈悲と憐みに満ちたイエスの神を受け入れることと密接につながっていると私は固く信じております。生活の中で主を優先するということは、福音的かつフランスカンの方法で疎外された人々を受け入れるための必須条件です。
- 4 . 私たちが自分を刷新し、自らの預言的な使命（ミッション）を果たし、貧しい人々を受け入れ、彼らと連帯する神の国のしるしとなるような兄弟共同体を築くことができるためには、神の御言葉を時代背景を踏まえて読むことにより養われた総合的な靈性を身につけることが緊急に必要であると私は感じております。
- 5 . 諸文化間及び諸宗教間の対話を促進することが必要であると私は思います。なぜなら、対話こそは、未来のフランスカン生活を形成する決定的な要素であると考えているからです。
- 6 . 私たちは、多くの慈善事業を手放すことなく、疎外された人々の尊厳が本当に尊重されるような文化を育てて行くことにもっと精力を注ぐべきです。
- 7 . 私たちの兄弟共同体の中で行われている受け入れ体験について分析し、検討することは、教会や一般社会で人を疎外しないようにするために、重要であると思います。
- 8 . 一般信徒や他の修道会で奉獻生活を営む人たちや、特にフランスカン家族の人たちともっと協力し合うことが必要です。

ガイドライン

- 1 . 私たちの生活の中で神の御言葉を最も重視し、御言葉を聖霊と共に新しい気持ちで、また貧しい人々と共に分かち合いながら読み、聞くこと。
- 2 . 貧しい人々を優先的に選択するという立場から、私たちの生活様式や仕事の仕方や経済組織を見直すこと。この方向でいくつかの重要な決定を下さなければなりません。そうすることによって、ミッションのためにある種の危険を乗り越え、自分を全面的に捧げる覚悟ができてくるでしょう。
- 3 . 経済的に苦しい国々の教会や兄弟会の経済活動に配慮すること。それは、兄弟たちが地元の人々の生活とかけ離れた社会階層をつくらないようにするためです。
- 4 . 兄弟共同体が明確なフランスカンのアイデンティティーをもって地域に溶け込むように支えること。社会にある既存の連帯ネットワークに積極的に参加し、そのダイナミズムの維持と人々に希望を与えることに貢献すること。
- 5 . 様々な相補的な世界フォーラム (in the alternative world forums) や政策決定の場で、奉獻生活の存在を証しするために、他の奉獻生活者と協力すること。人類の未来が決まってしまうような場があります。
- 6 . 人間の生命や尊厳が脅かされている場所に身を置き、他の奉獻生活者と協力しながら、疎外された人々の悲惨な生活状況を少しでも変えることができるような土台を築く可能性を探ること。
- 7 . 疎外された人々を生み出す社会において、移住者たちの近くに身を置き、彼らに同伴することを最優先すること。分

断された世界で交わりの力強いしとなれるような多文化的で国際的な共同体の育成を促進すること。

結論

この大会にご出席くださった兄弟の皆様、私たちは疎外された人々のためにたくさんのことを行っています。そのことのために、私たちは善なる神に感謝しなければなりません。神は、神の国を疎外された人々の中に築きたいとの願いを兄弟たちの心に芽生えさせてくださるからです。また、そのことのために働く兄弟たちにも、彼らの寛大さと献身ぶりに対して感謝いたします。しかし、私たちが抱えている難問もまた多いのです。このような状況の中で、次のことを提案いたします：

聖霊に心を開きましょう。聖霊の導きに身を委ねることによって、新しい視界が開け、私たちの生活の範囲が広がるでしょう。

聖霊に心を開きましょう。聖霊の恵みによって、この大会で語られた言葉は、私たち自身にとっても、また兄弟会の兄弟たちにとってもいのちをもたらすものとなるでしょう。

聖霊に心を開きましょう。聖霊は、私たちの小ささや恐れにもかかわらず、預言を解放してくれるでしょう。

聖霊に心を開きましょう。聖霊は、私たちにフランシスコの大胆さと創造性を与えてくれるでしょう。

聖霊に心を開きましょう。聖霊は、現代のハンセン病者の間に入って行って、彼らに思いやりを示すように私たちに励ましてくれるでしょう。

聖霊に心を開きましょう。聖霊は、辛さを魂と肉体の甘味

に変えてくれるでしょう。

聖霊に心を開き、私たちがそばにいることを期待している人々のもとに出かけて行きましょう。

附録 御言葉に照らされて

「聖霊によるものと聖霊に逆らうもの」(奉献生活 73) とを見分けるように呼ばれ (総括文書 7) すべてを吟味して、良いものを大事にする (テサ 5:21) ように呼ばれている私たちにとって、今こそ、個人としてまた共同体として、御言葉を祈りを込めて、時代に即して読むことにより、御言葉に照らされ、導かれる時です。フランシスコの場合のように、私たちにとっても、御言葉は私たちを新しい場所に導く星であり、生き方を通して、神の国とそれが彼らのものである人々、すなわち貧しく、疎外された人々を優先的に選択したことを証しさせてくれる力なのです。御言葉はまた、あらゆる状況において在り方を教えてくれ、慰めを与え、福音を告げ知らせ、和解を勧め、希望の言葉であると同時に告発の言葉でもあります。御言葉はまた、神の国の新しい兄弟性の真のしるしである兄弟共同体を築くことのできる礎でもあります。

私たちの預言的ダイナミズムを刺激するような文章はたくさんあります。たとえば、福音書に限ってみても、次のような文章は強く私たちの心に響きます；

ルカ 4 章 16 節以下は、イエスの素性と使命とを示しています。聖霊によって油を注がれることにより、人は神の解放

をもたらす愛を告げ知らせることができ、その愛をはっきりと示すしるしを実現することができます。福音書の物語の中には、イエスが行われたしるしが書かれています。今日では、これらのしるしは、いかなる見返りも求めず、ただひたすら解放の奇跡と神の国の新しい兄弟共同体の奇跡が実現することを願って生きるその在り方と献身ぶりであると言えるでしょう。

イエスの寛大さを示す文章は随所に見られます。イエスはその寛大さをもって民族の壁や社会的な壁を乗り越えられました。たとえば、シリア・フェニキアの女の癒し（マルコ 7:26 以下）、サマリアの女との出会い（ルカ 5:27 以下）、善きサマリア人のエピソード（ルカ 10:29 以下）。

何らかの形で疎外されて苦しむ人々に対してイエスが示された受容の態度を記した物語としては、次のようなものがあります。姦通の女に対して示された憐みの行為（ヨハネ 8:1 以下）、徴税人と一緒に食事をされたこと（ルカ 5:27 以下）、ハンセン病者を癒され、子供を祝福されたこと（マルコ 10:13 以下）。

現実とは異なる神の国とはどういうものかを示す八つの幸いの教え（ルカ 6:20-23; マタイ 5:1-12）。

弟子の足を洗い、弟子たちにも同じようにするようと言われた主のことを記したヨハネ 13:1-15。

これらの文章は、イエスのご生活と使命の中心が何であることを示しています。イエスはすべての人が命を受けるため、しかも豊かに受けるために来られました（ヨハネ 10:10）。この文章

は、疎外された人々との連帯への招きの意味を見事に言い表しています。連帯による疎外された兄弟姉妹との出会いの中にこそ、いのちの交流があり、それが私たちを成長させ、疎外された人々の中で神の賜物を豊かに増し加えるのです。

総長 兄弟ホセ・ロドリゲス・カルバッリヨ、ofm

．総括文書

1．大会の最終メッセージ

総長の緊急の呼びかけに応え、私たち JPIC 推進者たちは、2006 年 1 月 30 日から 2 月 8 日まで第二回国際大会のためにブラジルのウベルランディアに 40 カ国以上から集まりました。呼びかけてくださった総長に心から感謝いたします。

「識別」のために捧げられた今年 2006 年に、私たちは「創立の恵み」を共に祝うために第一歩を踏み出しました。会の創立時に戻るに際して、私たちはハンセン病者を抱きしめたフランシスコに出会い、彼のジェスチャーの重要な意味を非常に深い形で理解することができました。フランシスコ自身、この抱擁を新しい生活に向かって回心する決定的な要因であったと回想しています。それは、フランシスコが晩年に思い出した唯一の要因であり、ハンセン病者との出会いが神の導きによるものであった（「遺言」2）と述懐するほどであったのですから、単なる要因ではなく、決定的な要因であったのです。

私たちは会のすべての兄弟に次のようなお願いをしたいと思います。

門の外で：イエス・キリストは町の外でお生まれになり、路上で生活され、町の外で亡くなられました。フランシスコもア

シジの外でハンセン病者に出会いました。私たちの兄弟共同体や兄弟たちも、疎外された人々に出会うためには、預言的な方法で修道院や組織の門から出なくてはなりません。

優先順位：本会は、私たちの回心の第一歩として、疎外された人々を優先的に選択すべきです。ちょうどフランシスコの回心の第一歩がそうであったように。

預言的な敏感さ：すべての兄弟および兄弟共同体は、預言的な敏感さを身につけるべきです。それは、貧しい人々や疎外された人々を見分けるためだけでなく、貧困や疎外にいたるプロセス（原因、媒体、メカニズム、手段、結果、など）を見分けるためです。なぜなら、この敏感さを土台にしてこそ、私たちのカリスマにふさわしい選択をすることができるからです。

貧しいキリストを選択する：フランシスコは、自ら貧しい者となられたキリストに従うだけでなく、同じでありたいと願っていました。私たち兄弟会もフランシスコと同じように、貧しいキリストの弟子として、現代の疎外された人々を優先的に選択することを、第一の教えとし、動機とするべきです。

ところで、現代の疎外された人々を抱きしめるとはどういう意味でしょうか？ どうすればそれを実践できるでしょうか？ フランシスコにとり、その選択は、福音的な特徴を持っていたので、それだけで十分でした。しかし、私たちにはそれ以上の何かを要求されています。それは、私たちが彼よりすぐれているからではなくて、私たちの置かれた現代の状況がフランシスコの時代背景とあまりにも異なっているからです。聖霊の声と兄弟姉妹たちの苦しみの叫びによって担うように招かれている私

たちの責任もまた、異なっています。私たちはまた、疎外された人々の側に全面的に身を置き、彼らの解放のプロセスを分かち合うという意味で、一種の政治的選択をも迫られています。疎外された人々のことを気にかけて、彼らを助け、支援することは、これまで会が何世紀にもわたって見事に成し遂げてきましたが、それだけでは不十分です。今私たちに求められていることは、彼らと生活を共にすることなのです。それは、会の歴史の中で豊かに示されてきたことですが、少数の兄弟にしかできませんでした。私たちは、疎外の原因(疎外にもいろいろあり、多様なので、まじな疎外かもしれませんが)を分析し、疎外された人々が自ら起こす運動に参加するように招かれています。それは、彼らと力を合わせて、もっと別の尊厳ある生き方の可能性を見出し、実現することができるためです。

「(世俗を)出て、出会って、変わること」これは、現代において私たちの召命を生き抜き、「創立の恵み」を祝うために必要なダイナミックなプロセスです。それはすなわち、習慣を「捨て去り」、安全や快適さやあらゆる形の所有や選別(separation)を捨て去ることであり、疎外された兄弟姉妹と「出会って」、彼らに福音化してもらい、彼らと共に希望と喜びの場をつくることであり、神の現存の秘跡である貧しいキリストに忠実に仕えようと絶えず努めることによって、「変わること」、すなわち回心です。

疎外された人々をこのように抱きしめることを最優先することはできるでしょうか？これは、創立 800 年祭を祝うに当たっ

て、私たち JPIC 推進者が兄弟の皆様にも申し上げる具体的な提案です。

2. 提案

1. 疎外された人々について

- a. 会の創立 800 年祭を祝う期間中に、現代の「ハンセン病者」との連帯を示す具体的なしるしとして、管区及びすべての構成単位は、「難民、移民、少数民族、土地を持たない人々、亡命者に対して特別の注意を払うこと」(2003 年総集会総括文書、提案事項 3,c)。
- b. 会の創立 800 年祭の準備として、「創立の恵み」に明記されているように、管区及びすべての構成単位は、現代の疎外された人々や抑圧された人々に正義を示す重要なジェスチャーとして、回復(物理的空間、時間、金銭などの)のプロセス促進すること(「創立の恵み」17,19,21 参照)。
- c. 管区及びすべての構成単位と兄弟共同体は、どのようなグループがどのような過程を経て、どのような原因で疎外されているのかを突き止めるために、周囲の社会的現実を批判的に分析すること。そのために、聖書を神学的視点及び疎外された人々の社会的な視点から読むなどの神学的・社会学的手段を用いるべきである。
- d. 管区及びすべての構成単位は、もっと社会の裂け目に身を置き、社会運動と連携して働くようにと兄弟たちを励ますこと。
- e. 管区及びすべての構成単位は、地域に溶け込んだ兄弟共同

体（諸管区合同の共同体もあり得る）の存在を活性化し、発展させ、その過去の体験を見直すこと。

- f. 兄弟たちは、受胎から自然死にいたるまでのあらゆる形態や側面で、いのちの文化というものを育むために、真剣に努力すること。
- g. すべての兄弟及び兄弟共同体は、JPIC と協力して、「私たちの生活様式と自然界に及ぼすその影響を吟味し、環境に対してより責任ある行動をとり、環境正義を守る」こと（2003年総集会総括文書、提案事項 39a）。
- h. 本部執行部及び管区や構成単位の執行部は、裕福な兄弟と貧しい兄弟、裕福な共同体と貧しい共同体、裕福な管区や構成単位と貧しい管区や構成単位、司祭である兄弟と修道士である兄弟との間の不公平をなくすために、JPIC 担当室の協力を得て、養成や組織面及び経済面の見直しを行うこと。

2. 兄弟たちの養成

- a. 管区及びすべての構成単位は、疎外の原因の分析を、生涯養成や初期養成及び福音宣教のプログラムに必須案件として含むように、養成学問担当事務局及び福音宣教事務局に要請すること。
- b. 地域の兄弟共同体は、生涯養成及び初期養成において、疎外された人々の間で生活体験をさせることによって、彼らから学ぶチャンスを兄弟たちに与えること。
- c. 養成担当者は、フランシスコ会への入会希望者を同伴し、彼らが疎外された人々の中で自分の召命と宣教者としての

使命の識別を行うことができるように図ること。

- d. 管区及びすべての構成単位の有期請願宣立者は、終生誓願宣立前に、少なくとも1年間は疎外された人々の中で暮らすこと。

この第二回国際大会は、2003年の総集会の決議と2004年に南アフリカで行われた国際JPIC評議会での提案事項を再確認し、以下のことを主張します。

3. 2003年総集会の決議

- a. 国際JPIC評議会は、2003年の総集会の決議を実行するための適切な手段を模索し、その結果を見きわめること。
- b. 経済関係評議会は、会全体レベル及び管区レベルで、JPIC担当室と協力しながら、「資金の責任ある運用のためのガイドライン」(総括文書、提案事項40)を作成すること。そして、会の執行部及び管区とその他の構成単位の執行部は、連帯の経済の模範となるようなモデルを作るために尽力すること。
- c. 管区及びすべての構成単位は、2003年総集会の決議(総括文書39-41)に基づき、平和と非暴力の人となり、ゆるしと和解の使者・証し人となることの優先性を「取り戻す」(re-appropriate)ように兄弟たちを励ますこと。そのために彼らに求められていることは：

積極的な非暴力の分野で独特の霊性と養成を促進すること；

個人、共同体、社会、政治、経済、文化、宗教のあら

ゆるレベルで、紛争を解決する方法を促進すること；
紛争のある状況下でその解決に尽力する兄弟たちのグループを形成すること（フランシスカン・ピース・ミッション）です。

4 . JPIC の推進（アニメーション）

- a. JPIC 推進者（アニメーター）は、会のあらゆるレベルで推進役を務めるにあたり、養成学 問担当事務局と福音宣教事務局とのより緊密な協力を図ること。
- b. 管区長協議会は、JPIC 担当室の協力を得て、アジア、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパに、社会・政治・環境問題に取り組むための JPIC 推進（アニメーション）センターを設立し、他の社会団体やフランシスカンズ・インターナショナルと協力すること。
- c. 推進者（アニメーター）は、ローマの JPIC 担当室やヨーロッパ（continental）の JPIC 担当室や他の管区長協議会及びその他の構成単位とのコミュニケーションを強化すること。
- d. JPIC 推進者（アニメーター）は、あらゆるレベルで、フランシスカン家族や友好的な諸教会、社会運動などとの協力ネットワークを確立すること。
- e. 管区及びすべての構成単位は、他の構成単位や管区長協議会との連帯とコミュニケーションのネットワークを確立するために、JPIC 委員会や推進者に必要な援助を提供すること。
- f. 世界中の兄弟たちは、政治的、経済的、軍事的に力のある

国々（特にヨーロッパや米国）にある管区や構成単位に対して、疎外された人々の利益となるような決定プロセスに影響を及ぼすように働きかけること。これらの構成単位は、有能な兄弟たちがこの職務を果たすために必要で適切な研究ができるよう、彼らを訓練する義務がある。

2006年2月8日、ウベルランディアにて



現代の疎外された人々を抱きしめて
第二回 J P I C 国際大会 ウェルランディア
翻訳・発行：フランシスコ会日本管区
発行日：2007年8月25日
106-0032
東京都港区六本木 4-2-39
聖ヨゼフ修道院
03-3403-8088